

## 「ありがとう」の心をいただいて

住 職

新聞の投書欄を見ておきますと、3月末で定年退職をした男性の投書が目につきました。県外に住む二十六歳の息子から思いがけず、記念品と手紙が届いたという内容です。

その手紙には「長い間のお勤め、お疲れさまでした。これまで苦勞もあつたでしょうが、僕を育ててくれて感謝しています。……光旗という名前を付けてくれて、ありがとう。たくさんの人から『いい名前ですね』と言わ



須磨海岸にて

れます」と書かれており、何よりの退職祝いであったという事です。

今の時代、「合理的に考えて、能率よく、無駄のないように、なにごとくもやってゆきましょう」という理屈が当たり前のこととして受け入れられています。この理屈を「その通りだ」と思う反面、「人生はそれだけではない。その考えだけでは人間の尊厳を軽く見てしまふ面もあるのではないか」と叫びたい。人間の尊厳を軽視したり無視する傾向はストレスや不信感を助長し、さらに弱者に対する虐待などを導くのではないでしょうか。

世間のいたるところに不信感がただよっている様子を、毎日のようにテレビや新聞が伝えてきますので、「この世にはもはや、それしかないのか」とさえ思うこともあります。しかし、この手紙はそうでもない事を教えてくれます。手紙を書いた息子さんを育ててくれた親御さんに拍手喝采です。

「育ててくれてありがとう。いい名前をつけてくれてありがとう」ということは、気づきにくいことですし、心には思っている、なかなか口に出しにくい言葉です。親の苦勞に、親の心に気づいたとき、親に対する信頼と感謝の念が自然に湧いてきて、「ありがとう」の言葉がでてきたように思います。

親鸞聖人は、「恩を知り、徳を報ずる人生」、つまり「ありがとうの心とともに、生きる人生」をわたしたちに教えてくださいました。(次のページに続く)

(前ページより) 自分の事は何でも知ってるつもりが、何も知らない事実。自分の力で生きていると思いつ込んでいたが、生かされていたという事実。このことに気づかせていただくと、知らずに過ごしてきた自分の浅ましい姿を知り、気づかせてくださった「大いなるはたらき」を知ることになります。

「おはずかしい。もったいない。ありがとう」の心は、阿弥陀如来さまからいただいた心です。

## 信行寺門信徒会総会

四月二十四日(土)

信行寺門信徒会の総会が開催されました。現在の会員数は三百十四名。当日は六十五名の方々の出席となりました。

二十一年度の事業報告、会計報告、二十二年度の事業計画予算審議を行い、皆様の承認を頂きましてから、住職の法話へ



と続きました。昨年度は会員の皆様には大遠忌法要を迎えるにあたり、一丸となって協力して頂きました。ありがとうございました。

さらに本年は各役員の新役員に改定の年となりました。

新役員の皆様には、更なる発展を目指して、門信徒会へのご協力を宜しくお願い申し上げます。また、長年にわたり信行寺の興隆に力を尽くして下さいました役員七名の方々への功労を住職より表彰させて頂きました。平成十四年に発足して以来、本当にお世話になりました。厚く感謝申し上げます。表彰された方は次の皆様です。

長井輝子様 月田幹雄様 川口昭次様 辻 英子様  
万 董子様 藤本園子様 谷藤清子様 (順不同)

また、この度の総会では門信徒会会員の土池和弘様にご長男様の七回忌をご縁に粗供養していただき、当日出席の皆様にも頂きました。ありがとうございました。





## 花まつり

〈子供達のところに仏さまとの思い出を…〉

四月十日（日） 十七名の元気いっぱいな子供達がお寺に集い、おしゃか様のお誕生をお祝いしました。

花まつりは、いつの時代も変わらない幸せなひとときです。小さなお子さんは、

お母さんに抱っこされて花御堂をのぞき、幼い姿の小さなおしゃか様の像を見ると、にっこり笑って可愛いお手々を合わせます。お母さんも思わず、にっこりしてしまう光景ですね。

そんな思い出が、これから成長されていく子供達の生きる力となって、華開いてくれるようにと願わずにはいられません。

当日のプログラムは六年生の子供達がリードしてのお勤めに始まり、子供向けの



の法話、おりがみ遊び、手作り遊び、仏教青年会によるバルーンアートを行いました。

そして、参加してくれた記念には、信行寺子供会のご指導をして下さっている竹本典子先生のクラフト「しおり」とお菓子を頂きました。また来年も是非お参り下さい。

## キッズ英語くらぶ

月一回 日曜の午後

（約一時間半）

副住職の得意な英語を活かして、英語くらぶがスタートしました。

外国語は、リズムを感じて、楽しく学ぼうちに言葉が自然と出てくるものです。

難しいことは、学校で習うのですから、楽しむコツを教えてくださいましょう！！

小学校高学年から、中・高校生が対象。興味ある方は、見学に来て下さいね。

詳しい予定は、信行寺までお問い合わせ下さい。

## 子供も集える、お寺に！(信行寺キッズサンガ)

お寺は、大人だけがお参りするところ、と思っ  
ていませんか？

子供たちにも、もつともつとお参りしてもらい、  
仏様のお話を学んでほしいと思います。

正坐をして、合掌してから、大きな声でおつとめ  
します。すると、心も体もすっきりします。それ  
から、勉強したらどんなに賢くなるかしら？？？

なかなか、大人でもできることではないです  
ね。しかし、子供なら案外と素直にできる事か  
もしれません。

そんな、機会が少しづつでも増えるように  
と、キッズ・サンガを募っています。

現在、毎年の花まつりに参って来てくれる  
子供たちを中心に子供会ができました。

お寺にも慣れてきて、おつとめ作法もしっ  
かりしてきました。夏休み・冬休み・春休  
みには、子供仏教講座をしています。わか  
りやすく、仏教の歴史やいのちのつな  
がりを副住職がお話してくれます。

大人も顔負けの難しい質問も飛び出  
して、みんなで考えたり、相談したりと盛  
りだくさんですよ。

※ 本年度は、七月三十日(金) 十三時  
より、講座があります。お母さん方も  
ぜひ一緒に参加してください。

「ある ある ある」

副住職

中村久子さんという方をご存知でしょうか？

幼くして難病により両手、両足を無くしてしま  
い、想像を絶する苦難の人生を歩みながら、人生  
の後半は仏法、特に「歎異抄」に出逢うこと  
により救われていった方です。

先日、神戸文化ホールで行われた「報恩まつり」  
に久子さんの次女の富子さんが講演に  
来られたのですが、その時にお話された  
内容が、とても心に残るものでした。

久子さんの母親は愛情と厳しさを  
もって娘に接し、できな  
かぎり両手のある子供が  
することは独力ででき  
るようにしつけました。  
久子さんは肘から先の  
腕がないのですが、そ  
こに包帯でお箸をまき  
つけ、お茶碗は脇に挟  
み込むような格好で、  
自力でご飯を食べるこ  
とが出来ようになりました。  
それだけでなく、口に  
筆をくわえて書いた字  
は、普通の人でもなか  
なか書けないような達  
筆なものでした。

そうやって母親や祖母  
の教育のお陰で、どん  
な困難にも負けない精神  
力を培ってきたと思  
うのですが、度重なる  
不幸な出来事に心は荒  
みがちだったようです。

そんな時に「歎異抄」  
に出逢って、あつたか  
い慈悲の世



界に目覚めていかれ、今までは他の人と比較して、「私には手が無い、足が無い」と思っていたが「ないをそのまま、ない」と受け入れることによって、「ない」という想いを無くしてしまっただけです。

それによって、私には肘から上の部分が「あるじゃないか」と、この腕のおかげで、いままでこうやって生きてこれたではないかと、「ある」という側面に目を向けることによって感謝の心まで沸いて来たのです。

また、こういう話しも聞いたことがあります。コップに水が半分はいつているのを見て、「半分しかないじゃないか」と不満をいう人。そして「半分も入っている」と感謝の気持ちで受け止める人。同じ状況でもそれをどう受け止めるかで生きる世界は全く違ったものになるという例えです。

「ないない」と不満をいう心が如来さまの教えにより「あるあるある」の感謝の生活に転じられたのですね。

その久子さんが晩年、娘の富子さんに

「合掌が出来なかつたことだけが、唯一悔いが残る」

とこぼされたらしいです。手のある人にとっては合掌しようと思ひさえすれば、当たり前前に出来ることでも、

両手のない久子さんにとっては、どれほど如来様に向かつて合掌したくても、その合わせる手が無いのです。久子さんは娘の富子さんに向かって

「どうか私の分まで合掌をしておくれ」

と言っていたらしいですが、ついに富子さんは母親の前で手を合わせて見せることができなかつたということです。そして、初めて自然と合掌できたのが母親が亡くなった、その時だつたと。

「今になれば、なぜ母が生きている間に母の願いを聞きとどけることができなかつたのか、と思います。みなさまも、どうか片方の手を母の分だと思つて、こつやつて自分の片手と母の片手を合わせて合掌してください。」と訴える富子さんに答えるように、会場には念仏と共に合掌する人がたくさんおられました。

その時、久子さんの願いが時を超えて、富子さんの上にはたらき、そして、その富子さんを通して、私たちの上にもはたらいているのを感じました。



## 「旧跡参拝旅行に参加して」

中川 さなみ

六月二十四日、二十五日の二日間、御旧跡参拝旅行に参加させていただきました。

今年は、北陸四ヶ本山参拝の御縁にめぐまれました。真宗十派のうち四派も北陸・福井に本山があるという事に「なぜなんだろう」と、研修が楽しみでした。

バスの中で、ご住職の「真宗十派の系譜」の説明を受けてから、「真宗出雲路派本山毫摂寺」に参拝しました。御影堂・阿弥陀堂と丁寧案内と説明をして下さいました。次に「真宗山元派本山證誠寺」「真宗誠照寺派本山誠照寺」と続けて参拝しました。やはり、本山だけあって、それぞれに格式が感じられました。親鸞聖人七五〇回大遠忌にむけて、どの本山も色彩あざやかに塗り替えられていました。

一日目の最後は、東尋坊によって、断崖絶壁の景観で一息ついて、宿のあわら温泉に向かいました。温泉のお湯で昼間の緊張をほぐしてから恒例の宴会で親睦をはかりました。

二日目は、「北潟湖花菖蒲園」で薄紫の美しい花菖蒲を堪能して「真宗三門徒派本山専照寺」に最後の参拝をしました。昭和二十三年の福井大震災で御影堂は、傾い

て残ったものの、他はすべて倒壊し、再建復興したというお話に感慨無量でした。

四ヶ本山を参拝させて頂いて、どのお寺も心から親切に接して下さいました。そこに、親鸞聖人のみ教えを同じく頂いている、ということに親しさを私は、感じました。「本願寺のように大きくはないですが、同じ本山として肩を並べています」

「真宗十派の末寺がすべてあるのは、福井だけです」と、説明に付け加えて話されました。

お念仏の法悦を喜ぶ環境が、お念仏の輪を広げて、京都からも本山を移す程の地だったのでしょうか。

「なぜなんだろう」の答えが少しわかりました。今年の参拝旅行は、

親鸞聖人七五〇回大遠忌にむけて、有意義な旅となりました。

合掌





# 永代経法要にお参りして

多田 文男

先日、五月二十九日の永代経法要にお参りして、羽溪先生のご法話を聴聞いたしました。

前半は「南無阿弥陀仏を唱えることの有難さ」を自ら体験された時のお話、後半は小学生の作文を紹介されました。

その中の一つに「私のお母さんが二十歳の頃、卵巣ガンで余命半年とお医者さんに宣告されたそうです。入院してどうせ死んでしまうのだからと、毎日泣いていたとき、隣のベッドにいた人が、自分も同じ病気で手術したその大きな傷跡を見せてくれて、でも元気になれたのだからと言って励まされ、手術をうける気持ちになったそうです。

苦しい闘病生活を共に笑顔で頑張れたのですが、その半年後その方は亡くなりました。

でも、もしお母さんがその方に会っていなかったら、病気に負けて、私や弟は生まれていなかった。そう思うと今生きている人は、自分も知らない多くの人に支えられているのだ。だから命は大切にしなければならぬと思つた」と言う内容のお話がありました。

先生は、人の命は死んでおしまいではない。その人の生

き様や言葉がまた、ご縁ある人々の生き方に影響を与えて、多くの命につながっていくのだ、とお話され、「命のつながり」を教えてくださいました。

私は、最近になって、子供の頃以来また、時々お寺にお参りする事がかなう様になりました。そして住職、副住職や諸先生のご法話を聴聞して、この年まで歩んできた自分の行動や言動の愚かさに恥ずかしい思いがして反省することしきりです。

特に若い頃には、「自分さえ正しい行いをしていれば、他人にあれこれと指図される事はない。解からない者に、解かってもらう必要などない。」などと思いがついていた時期がございました。ごく狭い地域で、そこに住む皆様にお世話になりつつ小さな会社を営む身でありながら、こんな増長した考えは言語道断のことでした。今では、全てに反省してよく肝に銘じているつもりなのですが、愚かな振る舞いや悪い考え方を払拭しきれず、つい心無い言葉が飛び出しそうな気がして、心配することが未だに多々ある次第です。仕事でも日常でも、いろんな人々とのふれあいの中で、「ごく自然に振舞っていても、人を傷つけたり悲しませたりしない、いつも人の身になって物事が考えられ、行動できる」そんな人間に成りたいと思つています。その思いに少しでも近づくために、これからは時間の許す限りお寺にお参りして、住職、副住職をはじめ多くの方々の教えを請い、精進していきたいと思つています。

## 信行寺行事予定とご案内

### 夏期特別法座

八月十七日（火）

午前十一時から午後三時

シー・パル須磨にて

### 本堂納骨盆法要

八月十六日（月）

午後二時より 本堂にて

### 彼岸法要

九月二十五日（土）中西昌弘先生

二十六日（日） 住 職

午後二時より

### 西大谷納骨参拝

十月十七日（日）

バスで一緒に参拝いたしますので参加希望者はお寺にお問い合わせて下さい。

### 和顔愛語

### 一口法話

先日、神戸別院の主催で五木寛之さんの講演があったのですが、そのときの話のなかで、「蟹工船」という一昔前の小説がリバイバルされて流行っているということでした。過酷な労働条件のなかで苦しむ人たちの話なのですが、彼らは何千何万というカニを海から網でとらえて、船の上で茹でて、その場で缶詰にするのです。しかし、カニのことは一切話題にのぼらないのが不思議だということでした。その当時の労働者が、いかに悲惨だったかがテーマになっている裏で無惨に殺されるカニのいのちにはスポットはあたらなないのです。そんな人間のために殺されるカニのいのちに向けられる五木さんの視点が印象的でした。

その時、有名な金子みすずさんの詩を思い出しました。

「朝焼け小焼けが大漁だ オオバいわしの大漁だ

浜は祭りのようだけど 海のなかでは何万の

いわしの吊いするだろう」

いわしが大漁だ、と浜でおまつりさわぎの人間。

そのころ、海の中ではいわしの仲間達が吊いしてるだろう、という詩です。

つい私たちは、人間中心に物事の基準を定めてしまう時

「いのちの差別」をしているんですね。人間のいのちはカニや

いわしよりも優れていると。

でも、仏さまはいつもいのちを平等にみておられます。

仏さまから見れば、カニもいわしも、そして昨今話題になっている口蹄疫で殺される牛も、私たち人間との優劣なく皆等しく尊い命なのです。

